

以上を総合的にみると、世界の国旗の色彩と模様に見られた国民性は、風土（気候）と文化圏（伝統文化とイデオロギー）の両者によって大まかに規定されていると思われる。

お風呂の話

貝山久子

近頃の日経紙上に、家庭における子供、とくに赤ちゃんの沐浴担当者についてのレポートが出ていたことがある。これは東京を山手と下町にわけて調査したもので、山手では父親が担当する家庭が多いのに対し、下町では父親以外の者が担当する例が多い。これは山手方面には核家庭が多く、赤ちゃんの入浴は入浴それ自体より、あとの処理の方が熟練を要するのでそちらを母親が担当せねばならないのに対し、下町は商家が多いなどの関係で家族数も多く、必ずしも父親の協力を要しないのだそうである。

ところで我家では子供の入浴は概ね私の受持ちである。これは父親に依存することが時間的に無理であり、また「いくらパパでも男の人とお風呂に入るの一寸羞かしい。為でもあるが、小学校の6年と4年にもなった娘達と一緒に入るのは、子供達と一緒に過ごす時間の極めて少い私にとって、そこが絶好のヒューマンリレーションの場となるからである。学校での出来事、友人の噂、グループサウンズの話、考えたこと、たのみごとやこまごました注意 etc , お風呂場にはテレビもマンガも御馳走もないから、まことに意思の疏通がスムーズに行く。口と手が休む間もなく動いている間に、足の裏まできれいになっている寸法である。その上、週に一度は銭湯に行く。これは洗髪の為で長女の髪は長く豊富でとても家庭の風呂ではまかないきれないと、広い洗い場で存分にお湯を使い雰囲気は捨て難いからである。銭湯に行き出したのは戦時中燃料がなくて寮のお風呂がわかせなくなって以来の事であるが、浦和の銭湯も東京のそれも大体スタイルは同じである。しかし全国の銭湯が皆同じスタイルでないことは確かで、私の極めて乏しい体験から言えば、大阪では浴槽は一つしかなく、しかも洗い場の中央にあり、そのまわりにグルリとベンチ様の突出したものがあって、事実、人は皆そこに腰をかけて中のお湯を汲み出しては使うのである。混む時はそこが立錐の余地もなくなり、人の肩ごしに湯ぶねにとび込む勇氣はとて出ないと思われた。したがって所謂洗い場はコンクリートのままで、カランの数も少なかった。これは奈良女子大の寮に泊めて頂いた時も、洗い場が同じ様でとても座れなかったと記憶しているから、関西風なのかもしれない。昨夏福井県へ行った時、最近ようやく市に編入されたような田舎にも銭湯があって、早速行ってみた。ここはタイル張りになってはいたが、狭くてきたなく、シャワーがある事だけが取柄であった。

この稿を書くに当って手近な事典類をいくつかひもといてみたが、八瀬のかま風呂、愛媛県の石

風呂など特殊なものについての記述はあっても、銭湯の様式については何もふれられていなかった。人間の営みの中、生産に関するものはデータも得やすいが、生活（文化というべきか）に関する実態の把握は極めて困難である。蓋し生活地理学、文化地理学の発達のためだしい所以であろうか。

賤母本谷 — 続としよりのひやみず —

岡山 俊夫

地理学評論 6 巻 7 号「山崎直方博士記念論文集」所載「水準測量改測の結果と地形との関係」で私は、阿寺断層崖東部の断層階地塊が最近まで動いていたことを明らかにした。あれは実は、卒論の 1 章のサワリ的な部分を抜き出してまとめたものである。それから 27 年後の昭和 32 年秋、私ははじめて現地へ臨んだ。以来ほとんど毎年少くとも 1 回、多い年には 4 回、延長 80 km の同断層崖のどこかへ足を運んだ。主断層にそうては少くとも 2ヶ所で段丘が切られている。水準測量の結果にあらわれた階段断層（5 万の地質図に記入なし）に手を伸したのは 39 年からである。その西部では破砕帯を簡単に発見できた。中部ではいまだにそれが見つからない。去年は木曾山脈系統の断層と交錯している東部へ鞍換えをした。根拠地は妻籠、コカ・コーラを売る店もない、古きよき時代の姿をとどめている宿場である。

中央線の名古屋行き列車で三留野を過ぎると、木曾谷は東西となり、満々と水を湛えた賤母のダムが見える。その南岸の急斜面は国道がトンネルとなる辺は谷底から山頂まで露岩の連続だが、その他は黒々と国有林におおわれている。そこに喰い込む狭深な谷が賤母谷で、木曾川との合流点はバックウォーターが入江になっているからすぐわかる。車窓観察と、2 km ほど下流の藪には驚かない私にも気味の悪いほどの森林の繁茂状態とから、永い間私はこの谷は入れないものと思っていた。

昨年 9 月、賤母谷源流部の荒廃しきった細径を辿っていて、はからずも賤母本谷歩道なるものの存在を知った。へたにくだり込んでエライ目に遭ってはと、廻れ右して国道づたいに木曾川との合流点まで行ってみた。たしかに径が、しかも右岸にも左岸にもある。翌日、その日は藤村の「夜明け前」の舞台馬籠へ行って阿寺主断層の東端部を見るつもりだったが、早発、源流部で見つけた密林中の賤母本谷歩道へ踏みこむ。これまたしばしば立往生するくらい部分的に甚しく荒廃しているが、高校生のころ詠んだ「うす湿る 落葉の径はひとり行くわが登音さへ胸に泌むもの」という歌を思いださせて余りある趣があった。ただし、径は谷底から 100 m 以上の右岸を等高線なりに大迂曲をくり返しつつ、木曾川との合流点に近づいて急転直下し、露頭も景色も何も殆んど見えなかった。